



編集・発行 邑楽町役場企画課
〒370-0692 (住所記入不要)
☎ 0276-88-5511 (代表)
☎ 0276-47-5007 (企画課直通)
☎ 0276-89-0136
URL <http://www.town.oragunma.jp>
E-mail koho@town.oragunma.jp

邑楽町携帯サイト
2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。
携帯用URL <http://www.town.oragunma.jp/k>



〈第五十回〉

若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けします—。

あすへひとこと

～夏の特別編～

いつの時代までも残したい

邑楽町の昔ばなし



昔、爪は刃物を使って暗がり切っていたそうです。そんな暗闇での爪切りは危険という教えなのかもしれません。(写真はイメージ)

夜の爪切り

昔、若者が仕事を終わり、夕焼け雲のきれいな西空を眺めながら家路につくころには一番星が空に輝いていました。

若者は風呂に入り、夕食も終わり、ふと足の指先を見ると、爪がだいぶ伸びています。辺りから、あまり切れそうもないはさみを見つけ爪切りを始めると、晩酌を終えた親父がこれを見て大声で「夜に爪を切ると、親の死に目に会えないぞ」と怒鳴って怒り出しました。

若者は仕方なく爪切りをやめ「本当かな」と親父の顔を見返しました。世間では「夜6時以降に爪を切ると親の死に目に会えない」といわれます。

このいわれはどこから来たものかわかりませんが、若者はそれからは夜に爪を切ることをやめました。

一節には言葉のあやで「世を詰める」ということからませ、縁起が悪いともいわれて昔から忌み嫌われています。

墓地での遊び

時は昭和の初期。子どもたちの遊びといえど兵隊ごっこや川遊び。秋ともなると雑木林に入り栗拾いなど、いつもがき大将が先頭に立って、日の暮れるのも忘れて遊びに明け暮れていました。所嫌わ

ずに墓地でも遊んだものです。

時には悪賢い大人が「夕べ墓地に人魂が出た」などと脅しをかけたので子どもたちには一層怖い印象が強かったようです。そんな怖いところでも、子どもたちはいたずら仲間と相談して「今日は墓地で遊ぼう」と石塔の間を飛び走り、わんぱくぶりを発揮していました。当時の墓地は土葬が多く、古い墓地は土葬が崩れて小さな穴が開いていました。

夢中になって飛び回っているうちに、間違っってその穴に足を取られ、その場にぱったり転げると、それを見つけた仲間が「転ぶと死ぬぞ、死ぬぞ、死ぬぞ」とはやし立てました。

倒れた子どもは、どきっとして一度は顔色が変わりますが、すぐまた、けろっとして遊びを続けました。

遊びほうけた子どもたちは、幼心に「墓地で転ぶと本当に死んでしまうのかなあ」とかすかな不安を抱きながら、それぞれ家路につきました。

親たちは「墓地で転んだら着物の裾をまくりあげて自分の口でかめば、転ばなかつたことになる」と子どもたちに教えました。転んだ子どもは親に教わった通りの仕草をして、ほっとしたものです。

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
平成10年12月31日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より



夕焼けの水辺 (中央公園)

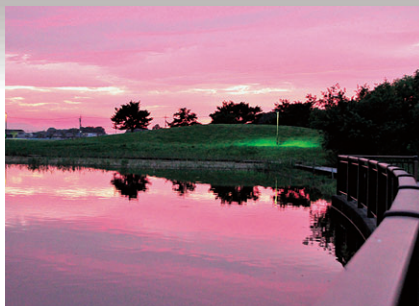


Photo 原田隆雄(記録ボランティア)

ひとりごと From editors

▶延長戦で決着がついた中体連野球大会決勝。結果は表紙のとおりです。梅雨明け初日の炎天下、どちらの投手も延長11回を一人で投げ抜きました。試合後、お互いをたたえ合う姿に正々堂々たるスポーツの素晴らしさを見ました。▶スタンドで応援した山崎恵美さん(新中野・33区)は「この日のために頑張っていた。絶対に勝って、と祈る想いをマウンドに送っていたそうです。そして、そのマウンドで勝利投手になった翔世さんは試合後、恵美さんに「育ててくれて、ありがとう」と感謝を胸に県大会での健闘を誓ってくれました。親が子を想い、子が親に感謝する。いつの時代も変わらないものなのですね。▶はてさて、広報おうらはこれからも邑楽町の中学生を応援していきます。頑張れ！中学生！！ちなみに私は南中野球部出身です。(深澤)



この広報誌は、自然保護のため植物油インキを使用しています。